

昔むかし、あるところに、貧しい女が息子とふたりで暮らしていました。息子の名は、ガムバールといいました。ガムバールは、毎日野原へ出かけ、あざみやかもじぐさを集めては、町に持って行って、二束三文にせくさんもんで売りました。それでやっとその日のパンを買うのでした。

あるとき、ガムバールは、皇帝の宮殿前の広場でもじぐさを売っていました。皇帝の娘が、窓からそれを見ていいました。

「お父さま、あの人は誠実ないい人に違いないわ。わたしが妻であれば、あんなぼろを着ていることもないでしょうに」

皇帝は、娘に腹を立て、大臣を呼んでいいました。

「行って、かもじぐさをここに連れて来い」

ガムバールは、皇帝が自分なんかは何の用があるのだろうと、恐る恐る大臣について行きました。皇帝は、ガムバールにいいました。

「わしがおまえを呼んだのは、娘をおまえと結婚させるためだ。妻にするか？」

ガムバールは、びっくりぎょうてんして物もいえませんでした。すると、皇帝の娘が、「何を恐れているのです。わたしの父があなたに娘と結婚させようというのです。さあ、わたしに結婚を申しこんでください」といいました。

結婚式のお祝いが、七日七晩続きました。ガムバールは、皇帝の娘を連れて、家に帰りました。

家は貧しくて何もありませんでしたが、母親は、皇帝の娘のために、穴あなだらけの敷物を床ゆかに敷きました。皇帝の娘はそこに腰を下ろして、

「きつとこれがわたしの運命なんだわ」とつぶやいて、神さまに感謝しました。

皇帝の娘は、自分のドレスを切って、ガムバールの服につきを当てました。あくる日、ガムバールは、また宮殿前の広場にもじぐさを売りに行きました。皇帝が窓からのぞくと、今日のガムバールの服は、それほどぼろぼろではありませんでした。

夕方、ガムバールが帰って来ると、妻は、とげで傷だらけのガムバールの手を見て、心がしめつけられました。そして、

「一日じゅうはいずり回って、かせぎは銅貨たった数枚。別の仕事をさがしたほうがいい

いではありませんか」といいました。

「わかったよ、おまえ。いうとおりにしてみるよ」

ガムボールは、夜が明けるとすぐ、市場に出かけて行きました。けれども、知り合いを訪ねてまわっても、なかなか新しい仕事にありつけませんでした。さんざん歩きまわったところ、ひとりの商人が近付いてきて尋ねました。

「どうだ。わしの所で働かないか」

ガムボールは、

「もちろんさ。ところで、給料は、一年にいくらくれるかい」といいました。

「正直な仕事を引き受けてくれたら一メーラ、不正直な仕事をやってくれたら、ニメーラはらうよ」

「わかったよ。かみさんにきいてくる」

ガムボールは、家に帰ると、妻に話して聞かせました。

「おれをやとってくれる商人がいるんだけど、正直な仕事なら一メーラ、不正直な仕事ならニメーラはらってくれるって約束した。どうしたらいいだろう」

妻は、

「正直な仕事で一メーラもらいなさい。たとえ十メーラくれるといっても不正直な仕事は断るんですよ」といいました。

「よし、そうしよう。商人は遠い国へもどる旅に出るそうだ。おれは、しばらく帰って来られないよ」

ガムボールは、妻に別れを告げて、商人とともに旅立ちました。

ろばに荷物を積んで、商人とガムボールは旅を続けました。ある荒野^{こうや}まで来たとき、商人がいました。

「この井戸のあたりで野宿をしよう。井戸に下りて行って、水をくんで来てくれないか」
「いいですとも」

ガムボールは、腰になわをまきつけて、井戸の中に下ろしてもらいました。井戸の中にぶらさがって、水をすくっては上に渡しました。じゅうぶんに水をくみ終えると、ガムボールは、

「さあ、おれを上につっぱりあげてください」とさげびました。ところが、だれかが下から上着のすそをつかんで離しません。ガムボールがびっくりして見下ろすと、井戸の

底に開いた扉いびきがふたつありました。一方の扉をのぞきこむと、頭のない死体が積まれてありました。もう一方の扉をのぞくと、切り取られた人間の頭が転がっていました。そして、この世のものとも思えないほど美しい娘が三人、座ってししゅうをしていました。そばには、銀のお盆が置いてあって、お盆の上にかえるがいつぴき乗っていました。そして、ひとりの若者がかえるを見つめてじつと立っていました。

娘たちが、ガムボールにたずねました。

「ほんとうのことをいってくださいな。わたしたちとこのかえると、どちらが美しいか。なぜこの若者は、かえるをいつまでもじつと見つめているのか」

ガムボールは、答えました。

「愛する者こそが、いつだって美しく見えるものさ」

そのとたん、かえるの体のはじめて、三人の娘たちよりもっと美しい娘になりました。

「これはいったいどうしたことだ」とガムボールは、さけびました。すると、若者が答えました。

「わたしがこの井戸の中に入ってから、四十年の歳月が流れてしまった。たくさんの人がここを訪れたが、だれひとり、あなたのように『愛する者こそが、常に美しく見える』と答えられるものはいなかった。それで、わたしは、その人たちの頭を切り落として、娘たちに渡していたのだ」

若者は、娘たちに向かって、

「この人のかしこいい答えのほうびを持って来てくれ」といいました。

娘たちは、熟したざくろをひとつずつ持って来て、ガムボールにさし出しました。

それから、扉がぱたんと閉じて、何もかも消えました。

ガムボールは、三つのざくろをポケットに入れると、上に向かって、

「さあ、引き上げてください」とさけびました。

商人は、ガムボールが無事に井戸から出て来たので、大喜びしました。これまでに、召使いたちが四十人も、次つぎとこの井戸の中で消えてしまっていたのです。

夜が明けると、商人とガムボールは、また、旅を続けました。やがて、むこうから、別の商人の一行がやって来ました。その商人たちは、ガムボールの村に向かって行くところでした。その中に、知り合いの若者がいたので、ガムボールは、

「お願いがあるんだ。この三つのざくろを、おれのかみさんに届けてほしいんだ」とい

いました。

「おやすいご用だ。持って行つてやるよ」

若者は、ざくろを受けとつて、旅を続けました。

ガムボールの妻は、お腹に子どもがいました。みずみずしいざくろが食べたい思っている、村の若者がやつて来て、いいました。

「旅のとちゅうでガムボールに会つてね。あんたにこのざくろを渡してくれつて、たのまれたんだ」

ガムボールの妻は、喜んで、ざくろを受け取りました。そして、ざくろを食卓に持つて行つて、さつそくひとつ割つてみました。すると、なんと、ざくろの中から、ダイヤモンドや真珠など、あらゆる宝石があふれ出て来ました。

妻は、宝石を売ってお金にかえ、新しい家を建て、牛や羊を買いました。そして、まもなく、かわいらしい男の子を生みました。

さて、ガムボールは、やつとのことで商人の家にたどり着きました。そして、そこでまるまる十七年、召使いとして働きました。

あるとき、商人が、ガムボールにいいました。

「旅のしたくをしてくれ。また商いに出ることになった。おまえの村を通つていくよ」
ガムボールは、

（家に寄つて、かみさんに会えるだろう）と思つて、喜んでしたくしました。

商人とガムボールは出発しました。昼も夜も旅を続けて、とうとうガムボールの国の国境いまで来ました。しばらく行くと、草原に、羊の大きな群れがいました。ガムボールは、羊飼いに、声をかけました。

「こんにちは。おまえさんは、この先の村のガムボールの家族のことを知つてるかい」

「あたりまえさ。おれは、ガムボールさんとこの羊飼いだ。この羊はみんなガムボールさんのさ」

「なんだつて。だれの羊だつて」

「皇帝さまの娘と結婚した、あのかもじぐさ売りのガムボールさんだよ」

ガムボールは、わけが分かりませんでした。そのまま歩いて行きました。すると、今度は大きな牛の群れに会いました。牛飼いに、

「これは、だれの牛かね」ときくと、牛飼いは、

「ガムボールさんのだよ」と答えました。ガムボールは、ますますわけが分かりませんでした。

ようやく村にたどり着くと、商人が、

「さあ、行って、おかみさんに会って来い」といいました。ガムボールは、大喜びで走って行きました。けれども、いくら探しまわっても、家が見つかりません。むかし家があった場所には、見たこともないほど美しい屋敷が立っていました。

ガムボールは、屋敷の庭に入っていきました。窓からのぞくと、妻とひとりの美しい若者が、座って、仲良く話をしているのが見えました。ガムボールは、窓の下でそっと聞き耳を立てました。

妻は、若者に、

「ああ、もしお父さまが帰って来られて、こんなに大きくなったおまえをご覧になったら、どれほど喜ばれることでしょう」といいました。若者は、悲しそうに、

「ほんの小さいときから、お母さまからお父さまのことを聞いてきました。でも、お父さまはいまだに帰らない。ぼくはもう長いことむだに待ちました」といいました。

「神さまは、情け深くていらっしゃるんだよ。元気でさえいらっしゃれば、いつかはもどって来られますよ」

ガムボールは、すぐに、家の中に飛びこんで行っていいました。

「おれは、帰って来たよ」

妻と息子は、ガムボールに抱きついて泣きました。ガムボールは、

「どうしておまえは、このような家を建てて、あのような家畜の群れを手に入れることができたんだ」とききました。妻は、

「あなたが送ってよこしたざくろのおかげです。あなたは知らなかったのですか？ざくろのひとつを割ってみたら、中から、ダイヤモンドや真珠など、あらゆる宝物が出て来たのです」と答えました。そして、奥からふたつ目のざくろを持って来て、さし出しました。ガムボールが割ってみると、やはり、宝石がこぼれ出しました。

ガムボールは、商人の所に行って、もう召使いとして働かなくてもよくなったことを話しました。商人は、

「おまえは長い年月を忠実に仕えてくれた。自由にするとよい」といって、これまでの給料を支払いました。

ガムバールと妻は、皇帝を屋敷にまねくことにしました。

すばらしい宴会が開かれました。皇帝は、やって来ましたが、ふたりを見ても、それがだれなのか気がつきませんでした。たくさんの食べ物や飲み物えんが出されて、宴もたけなわになったころ、ガムバールの妻が皇帝に話かけました。

「皇帝さま。あなたにはお嬢さまがいらっしゃいましたが、今はどうなさっていますか」

皇帝は泣いていました。

「貧しいかもじぐさ売りがおつてな。娘はその男を気に入ってしまったのだ。わしは腹を立てて、娘をそいつと結婚させてしまった。もう飢え死にしているかも知れない。わしは娘を破滅させてしまった。そう思って、わしは毎日泣き暮らしているのだ」

ガムバールの妻は、皇帝に抱きついていました。

「わたしがあなたの娘です。わたしが分からないのですか。これがわたしの息子。そして、これがわたしの夫、あのかもじぐさ売りです。あときわたしはあなたにいったではありませんか。この人は誠実ないい人に違いないって。この人が正直な仕事でどれほどの財産を作り上げたか、ご覧になったでしょう」

皇帝は、たいそうおどろき、喜んで娘を抱きしめました。お祝いの宴会は朝まで続きました。

ガムバールと妻は、自分の幸福を待って手に入れました。あなたたちも、自分の幸福は、待たねばなりません。

空からりんごが三つ落ちて来た。ひとつはおはなしをした人に。もうひとつは、おはなしを頼んだ人に。そして三つ目は、おはなしを聞いた人に。

村上郁再話

資料『ロシアの民話Ⅱ』ヴィクトル・ガツアーク編／渡辺節子訳／恒文社